原 著

The Cely Letters に見る ‘Particle *That*’ *

杉山 隆一*

＜要 旨＞

意味的には余剰であるこの特異な thatは ME 初期より認められ、その後 *Cursor Mundi* ではややまとまって見られた。その後 ME 期を通して一般的となり、やがて廃れていった。本稿ではその広がり、衰退の一端を窺い知るために15世紀後半に、一般市民である商人たちによって書かれた手紙文についてこの thatの分布を調べた。その結果、世代間で使用頻度の差が認められ、この時代すでに衰退の方向にあるのではないかという推論を行った。

キーワード：particle *that*　pleonastic *that*　中英語　15世紀　書簡集

0．序

13世紀初頭、中英語の中に散見されるようになったこの特異な thatの使用はまだその世紀ではきわめて稀であった。[1] やがて14世紀以降一般的となり広く使われるようになったが、結局その後徐々に衰退の道を辿り、ついには一般的には廃用となった。ただし、archaic なレベルでは今日も見られるという。[2] 現代英語のシンタックスの観点からすれば意味の構成上、まったく不要な語ということになり、‘pleonastic *that*’とも呼ばれる所以である。この thatに関しては Chaucerの英語（韻文）については Kivimaaによる詳しい研究があるが、その他の時代や通時的な詳細は必ずしも明らかにされているとは云えない。先に Chaucer後の15世紀の散文についておおまかな状況を調べたが、小論では15世紀の商人たちの手になる手紙文について見てみたい。15世紀には *Cely Letters* と呼ばれるある意味では特異な文献が残っており、その中でこの thatがどのような分布を示すのかを探ってみたい。[3]

1．コーパスについて

先に述べたとおり15世紀の一部散文について調べたが、thatに先行する語によって頻度の差はあるもののまだ広く一般に使われていることが分かった。[4]小論ではその調査の対象を1479年から1488年に書かれた商人の手紙文に絞り、‘particle *that*’の分布状況を見てみることにする。

Cely Letters は同時代の他の書簡集とは大きく異なるものである。テクスト編纂者の Hanhamは言う：

同時代の書簡集として残るものに Paston家、Stonor家、Plumton家のものがあるが、これらがいずれも‘gentry’に属する人々であるのに対して、Cely家の人々は商業に携わって（in trade）いる点が基本的に異なる。確かに Stonor家もこれとまったく同じ家業ではあるが、その最大の関心事が‘the affairs of their country estates’であるのに対して、Cely家の人々のそれは‘in city affairs and in their business’にあるという点でこの書簡集は前三者とは根本的に質を異にするものであると Hanhamは主張する。

したがってこの *Cely Letters* は言語学的見地からも特異な存在で貴重な価値を持つものであると言う：

> Linguistically, the collection occupies a special position as a record of the commercial English that had been developing over some four centuries of English involvement in international trade, and as a generally unselfconscious reproduction of the speech and writing of middle-class Londoners.[5]

2．‘Particle *that*’の出現状況

まず今回対象としたコーパスの中に見られた‘particle *that*’の全体の頻度数をそれに先行する語別に示すと次のようになる。

* 西南女学院大学人文学部 人文学科 教授

Words	become	before	for	how	howbeyt	if	since	till	when	whether	whom	Total
	2	1	4	32	1	3	2	2	5	1	1	54

さらにそれぞれの語が現れる環境を示すために各語について例文を挙げる。[6)]

【because】it fortuneyd that Wylliam my serv[ant]was logeyd with hym at London, and because Þat he was a str[aunger]and not knowen, therfor Þe sayd Barkwey...(246) / 【before】for the weche I wyll avyse you for to purchese a save condyte in onny wyse or that the se,...(107) / 【for】Syr,s [che ys] sade and not grettely mery, for that sche ys nat so ase [sted as] sche was wontte to be; ...(223) / 【how】 and I pray yow, syr, hertely to send me word whowe that ȝe haue cone with them...(135) / 【how】and theyr he schewyd how that Þat matter ley betwyxte anoder man and yow,...(215) / 【howbeit】And master, howbeyt that I have charged you ofte and many tymis with many thingys...(244) / 【if】And yeff that [Thomas] Kesten woll not be agreabell vnto thys b[arg]en he [b]e neydere Goddys man nayder manys,...(9) /【since】Syr, I spake not wyth the Byschoppys afesars syn that I resauyd your letteer.(165) / 【till】Syr, I receyuedd noo letter ffrom yow syn that ȝe departyd ynto Flanders tyll that Jysse cam, etc.(199) / 【when】And wan that ye haue sould them, I pray you that ye woll by me j pyesse of Holaond sclothe for schetys,...(69) / 【whether】and he sayd that my Lord sent hem heder for to wete wheder that ye war y-comen hom or non...(40) / 【whom】And yf yt ples you that I may haue j or ij of them at a resnabyll prys and asyn me in Eynglond to whom that you wyll that I scall pay at the prys that you do sett of them.(63)

総頻度数56の中でhow thatが抜きん出た頻度で見られるが、あとは大差ない。これを前回の一般のテクストをコーパスとした場合と比べてみると、前回の場合、いちばん多かったのがbecauseであとwho, after, for, whileと続き、頻度数が低いtill, which, when, how, beforeが続いた。前回は低い数字に留まったhow thatが今回は突出していることと、which thatが見られないことを除いては特に言及すべきことはない。

3．個人別使用頻度

この書簡集はCely家の人々とそれに親密に関わる人々によって書かれたもので、原則として宛名と署名があり、誰によって、いつ書かれたかがはっきりとしている。そこでその観点からこれらの'particle *that*'の分布状況と各人物との関連を見てみる。

	R 1	Robert	R 2	George	J. Cely	Maryon	W. Cely
that 使用数	2	0	3	3	0	10	27
全書簡数	33	5	49	15	3	13	68
一通当りの頻度	0.1	0	0.1	0.2	0	0.8	0.4

この表に示されたthatの使用回数は単純には比較できない。それぞれが書いた手紙の収録数が異なるからである。例えばWilliam Celyの使用頻度は突出しているが、収録されている手紙の数も多いのである。そこで書簡の長短は一応置くとして手紙一通あたりの‘particle *that*’の使用回数を出してみたのが第３欄目に示している数字で、四捨五入して小数点第一位に揃えたものである。ここではMaryonの数字が突出し、かなりの差があってWilliam Celyが続き、Cely家の息子たちのRichard２（上の表ではＲ２と表記、Ｒ１を含めて次節参照）とGeorgeのそれはきわめて低く、Robertはゼロとなっている。Williamの数字はMaryonに比べると半分ほどだが、後者３人に比べるとかなり高い数字であると云える。

４．考察

これらの数字がどのような意味を持つのかを考えるとき、個々の人物についての情報にその手がかりを求めることができる。Hanhamによれば書簡の文面から分かることは次のようなことである：Cely家の家族はまず父親のRichard（同名の次男と区別するために以後Richard１とする）、長男のRobert，次男のRichard（同様な理由でRichard２とする）、三男のGeorgeである。William MaryonはRichard２の‘god-father’であり、‘a merchant of the Staple’である。William CelyについてはCely家の‘apprentice’であり、多分‘a family dependent’であろうと推察できるが詳細は不明である。ただCely家の人々に対しては‘always wrote with great deference’という。

これらのことから世代的には二つのグループに分かれ、Richard１とMaryonが古い世代に属し、残るRobert, Richard２, George, W. Celyの４人が若い世代に属すると考えられる。以上の事実を下敷きにして改めて上掲の個々人のthatの平均使用率を見てみると、いわゆる若い世代に括られる３人の息子たちの使用率が低いが、年配の世代に属する２人のうちMaryonは最高の高率を示しているのに対して、Richard１は極端に低い数字となっている。Richard１を除けばだいたい若い世代は低く、古い世代は高いという傾向が見えてくる。つまり、この時代にあって‘particle *that*’の使用はやや古い、形式ばった表現と感じられるようになりつつあるのではないかと推察することも可能であろう。

残る問題はRichard１とW. Celyの他とかけ離れた使用頻度数の解釈である。まず前者の低頻度はどのように考えたらいいのであろうか。Hanhamが彼の手紙文から得た印象は‘a careless and inelegant writer’であるという。このことからして、彼は日常の話しことばや若い人たちが使うことばをさして考えもせずにそのまま書きつけたのではないかと考えられる。そう考えると同世代のMaryonとのギャップが理解できよう。

一方、William Celyの方はCely家の３人の息子たちとほぼ同世代であると考えられるが、その３人の低い頻度数に比べると２倍以上も高い。それはちょうどいちばん高いMaryonと他の若い世代のグループの中間に位置する数字となっている。これは前述したように彼はCely家の人々に対して‘wrote with great deference’とあることから、上記３人の若者たちはCely家の家族という気安さを基本にしているのに対して、Williamはおそらく遠慮、気配りを要する立場にあり、彼らとは異なって丁寧な言葉使いを心がけた、その結果であると考えられる。

このようなことを勘案すると、この時代にあって‘particle *that*’の使用はやや古い、形式ばった表現であると感じられるようになりつつあるのではないかとも考えられよう。

問題のWilliam Celyについてそのことばの使い方の傾向を知るもう一つの事実を見てみたい。この*Cely Letters*に収録された書簡は1472～88年に書かれたものである。[7] Hanhamは William Celyの手紙文の中に用いられた動詞の３人称単数現在の活用語尾の形を数えた。結果は次のとおりである。

	-th	*-s*	zero
1479-82 年	40	21	3
1483-84 年	48	8	4
1487-88 年	47	5	7

これと平行してRichard 2とGeorgeに関しても調べたところによると、前者もさることながら、特に後者は1486年以後 -s の使用が急速に増加し、時代の傾向を映す。これに対して上の表に見られるとおり、William Celyに関しては比較的若い世代に属すると考えられるにもかかわらず、逆に活用語尾 -s はむしろ減少への動きを示し、他方でほぼ一貫して古い形の -th に大きく拘っている。Hanhamが見るようにWilliam Celyはこの語尾を‘the correct literary form’と考えていると見るのが自然であろう。したがって彼の書く手紙文は必ずしもその時代日常使われていることばの姿を映すものではなく、やや格式ばった文語調の響きを持ったものであったと想像され、前述の‘particle *that*’の頻度の高さが理解される。

5．むすび

羊毛交易に携わるCely一家の書簡を通して見た‘particle *that*’の出没を見てきた。前述したように特にこの家族は商人の一家で、本来文筆には特別の関心や衒いは無く、必要に応じて手紙を書き、それも主として身内のやりとりであることなどからその文章は率直に時代の姿を映し出していると思われる。Hanhamが調べた動詞語尾の使用頻度の変化は中英語末期から近代英語へと移り変わる状況を映し出している。使用頻度の多寡は判断できないが、‘particle *that*’はもうこの時期少なくとも若い世代の間では廃れつつあり、やや硬い、形式ばった響きを持つようになってきているのではないかと判断することができよう。それはまたこの時代の、日常使われる話しことばとは少々ずれた、いわゆる「文語体」の存在を垣間見ることにもなるであろう。

【注】

* ‘Particle *that*’の定義に関しては次の箇所を参照：杉山隆一「‘Particle *That*’覚書き」『文藝と思想』Vol.62, 1998, pp.33-43.

1. Cf. Kirsti Kivimaa, 'The Pleonastic That in Relative and Interrogative Constructions in Chaucer's Verse', *Commentationes Humanarum Litterarum*, Vol.39, Nr 3, 1966.
2. Cf. H. Poutsma, *A Grammar of Late Modern Engliah*. Groningen: Nordhoff, 1904-29. Rept. Tokyo: Senjo-shobo. p.682.
3. 使用したテクストはAlison Hanham (ed.) *The Cely Letters* 1472-1488 . EETS 273. 1975. である。
4. Cf. 杉山隆一 1998.
5. Hanham, *Cely Letters* ,viii.
6. 例文末尾の括弧内の数字はテクストにおいて各書簡に付せられた番号を示す。
7. 一家の長、Richard Cely（R 1）は1482年に死去。

'Particle *That*' in *The Cely Letters*

Ryuichi Sugiyama

＜Abstract＞

This particular use of *that* seen only sporadically in early ME became popular through ME period. But it declined and fell into disuse in the course of time. In order to see one scene of the change we examined *The Cely Letters*. The collection of letters is written by the Celys and the persons related, all in trade. Disparity between generations was recognized in the use of the particle *that*.

keywords: particle *that* pleonastic *that* ME 15th century letters